

『妹の夏休み』

〈恋春アドレセンスに続く短編〉

著者・八日なのか
発行・エクレール

兄がいなくなつて三ヶ月と少しが経ち、春から夏になった。

兄のいない夏など夏ではないが、世間的には夏であり、夏休み真っ盛りの時期だ。みなプールだの夏祭りだのに興じ、貴重な青春が少しづつ過ぎ去っていくのを感じることもなく、若さ故の過ちを繰り返すのだ。

無論、妹はそのような俗物にうつつを抜かす趣味はない。しかし、妹がうつつを抜かすべき相手がない。いなくなつてしまった。当たり前のように側にいて、当たり前のように接していた兄が今はいない。タンスの引き出しを開けても、ベッドの下を覗いてもいない。隣の結崎家にもいない。どこにもいない。いないいない兄さんがいないいない私のお兄さんがいないいない兄さん兄さんどこに居るの教えて兄さん兄さん私の兄さん！

……この虚無感を埋めようともがけども、妹の心が満たされることはなかった。妹にとって兄という存在は絶対で唯一無二のものだった。日に日に薄まる兄のシャツの匂い。我慢できなくなつて兄の部屋で寝るようになってから、兄の部屋がだんだん妹の匂いになってきてしまつて、やつちまつたと思つた時には、もはや妹は限界に近いのだと悟つた。

「母さん、兄さんに会いに行くから新幹線代ちようだい」

「……………」

無視された。休日の昼間から、3人掛けのソファに横たわってテレビのチャンネルを5秒間隔で変えながら、だらしなくパンツ一丁の尻をぼりぼりと搔いている我が母は、妹のかわいいおねだりを完膚なきまでに無視してくれおった。

「母さん」

「……………」

目を開けながら寝ている。なんとという墮落っぷり。しかも無視した挙げ句、一瞬で寝落ちするとは。主婦歴数十年の既婚女が、ここまで墮落してしまっているものだろうか。これでは旦那さんに愛想尽かされてしまっても致し方がないだろう。

でも妹が心配してやることもない。寝ているからといってテレビを消すとなぜか怒るのでそのままにし、台所で食器の漂白をしていた父の元に向かう。

「兄さんに会いに行くからお小遣いちょうだい」

「ああ、千冬。お小遣いをあげたいのは山々なんだけど、僕の財布には今百円玉すらないんだ……」

「この甲斐性なし」

「ううっ……実の娘に甲斐性なしと言われてしまった……。でもしようがないんだ……。百夏が月のお小遣いを五百円しかくれないから……。娘にお小遣いすらあげられない……。ああ……」

なにやらネガティブまっしぐらになっているが、自業自得なので同情しようにも難しい。この男のお小遣いが子ども並の額になってしまったのは、すべてこの男のせいなのだ。結婚二年目の記念

日のデートを自分で誘っておきながらすっぽかし、特撮ヒーローモノの限定版ブルーレイボックスを買いに行き、挙げ句の果てには自宅でむくれていた母にそのブルーレイを一緒に見ようなどと言い出したこの男が悪い。当然実家に帰られるぐらいはこじれたが、なんとかここまで仲直りできたのは愛ゆえのことだろう。結婚生活とは、いつまでも男と女であることを忘れてはいけないのだ、というのは姉の言葉である。ああ見えて子どもがいなくていいところではそこそこブラブラしてたりするので、お小遣いが少ない程度はさほど問題でもないのだろう。妹にとっては一大事だけでも。

「そういうえば守柙と一春は、夏休み中はこっちに帰ってこないのかな？」

「帰ってこないって」

実家に帰ってこないほど、向こうの生活が快適と思われる。姉はともかく、そんなにもあのおまんじゅうもぐもぐ星人との仲睦まじい生活が楽しいのだろうか。春先に向こうの学園へと入学するため兄といっしょに旅だったお隣の結崎叶衣は、

『カズちゃんとふたりでひとつ屋根の下。新婚生活みたいだねえ……もぐもぐ』

などとふざけたことをほざいていたが、まさか兄までそのような生活に甘んじているとは。この妹が乗り込んで直々に正さねばなるまい。

「どうしても妹は兄さんと幼馴染みの生活を認めるワケにはいかない」

「なんだかラノベのタイトルみたいだね」

「オタッチー」

お小遣いを制限されてもオタク趣味は直らない父。

「しかし困った。妹は今すぐ兄さんに会ってお股を擦りつけないとお股が乾いて死んでしまう」

「カッパじゃないんだから……」

「どうにかしないと、母さんのパンツのゴム引っ張ってバチンってやったの、父さんのせいにする」

「やめて！ 欲情したのかって半日いじられるからやめて！」

「やめて欲しければ妹を兄さんの元へ連れて行って」

「うーん、困ったなあ……」

「パンティゴムパッチン」

「わ、わかったよ……」

なかば脅迫じみたおねだりとなったが、日和見な父を動かすにはこうでもしないといけない。どうやって新幹線代を工面するかは知らないが、父はサンダルをつっかけて外へ出て行った。

「コンビニ行くならアイス買ってきてええ」

いつの間にか起きていたのか、母がソファの背から手を振っていた。そしてその手はぱたりとソファの向こうに落ちていき、再び寝息が聞こえてきたのであった。

「あらあら、ちーちゃんお兄ちゃんに会いに行くの？ 偉いねえ」

「ちよっ……頭撫でるのやめて」

ほんわかオーラが漂う叶衣の母はいまだに妹のことを子ども扱いする。このほんわかぼいんばい巨乳若おばさんを見ると宿敵妖怪オサナジミを思い出すので苦手だ。

「すまないね……僕は明日も仕事で動けないんだ」

「気にすんな！ 困った時はお互い様だろ？」

うちの父の肩を強引に掴み、ガハハハと笑っているのは叶衣の父である。イケメンマッチョで、夏だからかこんがりと褐色に焼けている。真つ白な肌の叶衣母が並ぶとコントラストの差に目が痛くなる。

うちの両親と結崎家の両親は大学時代の同期で仲がよく、昔から家族がらみの付き合いをしていた。どうやら叶衣の様子を見に行くらしく、車で行くのでついでに運んでもらうことになったようだ。

「いいのよ、せっかくだから娘の愛の巣を見ておこうと思っていたから」

「愛の巣言うな！」

「もう結婚できる歳じゃないか！ 俺も早く息子が欲しいぞ！」

「父さん！ なんとか言ってやって！」

「き、気が早いなあ……あは、あははは……」

なんと役に立たない……兄さんが叶衣となんか結婚してしまったら、妹まで叶衣の妹になってしまっじゃないか。妹はお姉ちゃんと兄さんだけの妹なのに。

やはり早く兄さんに会って妹汁でマーキングし直さないとマズい。

「それじゃあ、ちーちゃん出発しよっか？ 忘れ物ない？ おやつは持った？」

「だから子ども扱いしないで」

「おいおい、千冬ちゃんには兄妹モノのエロ本だろう！ そうだろう！ ガハハハハ」

「わかってるけど、ヘンタイか」

「わちやわちやしながら結崎家の車に乗り込む。後部座席にはおまんじゅうの箱が重ねて積んであった。叶衣への補給物資だろう。腹いせに全部食ってやるうか。」

「ちーちゃんもいるし、いつも以上に安全運転でお願いね？」

「わかってる。スピード出そうにも40キロ以上出すとお前酔っちゃううか？」

「あらまあ、そういえばそうね。うふふふ」

「ちよつと待って。今日中に向こう着くの？」

「結崎家のまったりペースに早くも不安になりつつ、妹は携帯を取りだして、お決まりの番号にコールする。」

「もしもし、兄さん。妹、今会いに行くから」

「あ、そう。来なくていいぞ」

「ぶつと一方的に電話を切られてしまったが、久しぶりに聞いた兄さんの声は電話越しでも妹のお股を震わす程度には魅力的だった。」

「兄さんの声……すてき！ ぐへ、ぐへへ……」

「シートにタオル敷いておいて正解だったわねえ……もぐもぐ」

「汗も噴き出すぐらい元気なことはいいことだ！ 若者は元気よく！ さあ出発だ！」

「はあはあ……兄さん……待っててね」

まだ見ぬ兄の新生活の地へ、股を濡らしながら向かう妹の旅は今始まったばかり。

だけでも、妹の心はいつも兄の側に。

妹の夏休みはまだまだ終わらない。